

令和元年6月11日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2015～2018
課題番号：15K02893
研究課題名(和文) フロンティアとして見た歴史的アフガニスタンの研究

研究課題名(英文) Study on historical Afghanistan as a frontier

研究代表者

稲葉 穰 (Inaba, Minoru)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：60201935

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：南アジア、西アジア、中央アジアの接点、フロンティアとしての歴史的アフガニスタンについて、文献、貨幣、考古等、多面的に研究を行い、その成果を国際学会、国際研究集会で報告した。また自らノートルダム大学(アメリカ合衆国)と共催で国際学会を開催し、関連分野の世界的権威の参加を得て、極めて質の高い学術的議論を行う場を設けた。ちなみに同学会の成果は論文集としてノートルダム大学出版局より英文にて刊行予定である。さらに関連する研究プロジェクトを発展させたものとして、2018年度よりオーストリア科学財団(FWF)の国際研究プロジェクトのコアメンバーとなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前近代中央アジアに関する研究は、日本が特に大きな業績を残してきた領域であり、前世紀後半には活発な発掘調査も行われてきた。それらの実績の上に立ち、文献資料、考古資料、貨幣資料等の研究成果を総合して、南アジア、西アジア、中央アジアのフロンティアに位置し、どの地域の記録においても詳細な情報が残っていない領域を、現代の我々がどのようにして研究できるか、という課題にとり組み、一定の成果を上げたという点は意義があると考えられる。また、2019年度以降に採用された基盤研究Bや、オーストリア科学財団研究プロジェクトなど、本研究計画に深く関連を持つ新たな研究が計画される土台を形成したという点も重要である。

研究成果の概要(英文)：The research on the historical Afghanistan as frontier between South, West and Central Asia has been carried out from multiple facets such as based on literary sources, archaeological findings, and coins. Some parts of the results were presented at international conference and research meeting. In 2017, I have organized, in collaboration with the University of Notre Dame, an International Symposium at London on the topic of Pre and Early Islamic history of eastern Iran and Central Asia, gathering many world leading specialists on the fields. The result of this symposium is now under editing and to be published from the University Press of Notre Dame next year. And from 2018, I am collaborating colleagues within the frame work of Austrian Scientific Fund (FWF) Research Project "Cultural Formation and Transformation" to carry out overall research on the history and culture of eastern part of historical Afghansitan.

研究分野：中央アジア史

キーワード：アフガニスタン フロンティア 文化交流史 貨幣学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

前近代ユーラシアにおける政治的文化的交流という大きなテーマは19世紀以来、多くの学者達の興味をひき、膨大な研究がなされてきた。中央アジア、西アジア、南アジアという異なる文化世界、歴史世界が接触する現在のアフガニスタンを中心とし、アム川北岸、パキスタン西部を含む地域(歴史的アフガニスタンと呼ぶ)についても同様の観点から活発な研究が行われてきた。一方20世紀の前半から活発化した考古学調査の成果は、アフガニスタンにおけるフィールドワークが困難となった1980年代以降、十分な時間をかけて分析研究された(例えば G. Verardi & E. Paparatti, *Buddhist Caves of Jāghurī and Qarabāgh-e Ghazni, Afghanistan*, Rome, 2004; *East and West* 56: Memorial Volume for 50th anniversary of IsIAO Italian Archaeological Mission in Pakistan, 2006などを参照)。さらに1990年代に「発見」されたバクトリア語碑文(N. Sims-Williams & J. Cribb, “A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great”, *Silk Road Art and Archaeology* 4, 1995-6; J. Lee & N. Sims-Williams, “The Antiquity and Inscription of Tang-i Safedak”, *Silk Road Art and Archaeology* 9, 2003)、3世紀から8世紀におよぶバクトリア語世俗文書の公表(N. Sims-Williams, *Bactrian Documents from Northern Afghanistan*, 3vols, London & Oxford, 2000-2012)、歴史的アフガニスタン由来の貨幣資料の調査分析の飛躍的進展(M. Pfisterer, *Hunnen in Indien*, Vienna, 2012; K. Vondrovec, *Coinage of the Iranian Huns and Their Successors from Bactria to Gandhara*, Vienna, 2014.)などにより、この地域の古代・中世史研究はまったく新しい局面を迎えつつあった。その一方で、叙述資料の絶対的不足は依然としてこの地域の歴史の通史的解明を困難なものとしていた。資料の種類や時代に左右されずに、この複雑な歴史を有する地域を研究するため、申請者は従前の研究において自然地理的環境に着目し、歴史的アフガニスタンの、特に山岳地域を通過する道と峠に焦点をあて、それらを通じた南北、東西の連絡が時代によってどのように変動したのかを探ってきた(たとえば、稲葉穰「ガズナ朝の王都ガズナについて」『東方学報』京都66, 1994; 稲葉穰「8-10世紀ヒンドークシュ山脈の南北」『西南アジア研究』79, 2013など)。また2013年にはアフガニスタンおよびヨーロッパからの研究者八名を迎えて、古代・中世アフガニスタン史に関わる国際シンポジウム(Exploring the Past and Envisaging the Future: Current Issues in the Ancient History of Afghanistan, 2014年11月26日~28日、京都大学人文科学研究所、龍谷大学龍谷ミュージアム)を主催し、現地研究者との共同研究の道筋も調べてきた。2000年代になってから、東南アジア研究の領域において大陸部東南アジアから中国四川省、あるいはインド東部、チベット、ヒマラヤへと続く山岳地帯を、共通する文化要素と生産形態を有する一つのまとまった領域と見なし、平地に成立した前近代国家と、このアクセス困難な山岳地帯との関係が歴史の重要な動因であったとする研究が発表された(W. van Schendel, “Geographies of knowing, geographies of ignorance: jumping scale in Southeast Asia”, *Environment and Planning D: Society and Space* 20, 2002; J. C. スコット(佐藤仁他訳), 『ゾミア - 脱国家の世界史』みすず書房, 2013)。その後ファン・スヘンデルはこの山岳地帯(ゾミア)が更に西方、カラコルム山脈からアフガニスタンの山々をも包含するとし(J. Michaud, “Editorial”, *Journal of Global History* 5, 2010)、ユーラシア大陸を東西に貫く山岳地帯のさらなる比較研究の道を開いた。アフガニスタンの中央部、北東部に屹立する山岳地帯とその周辺の平野部の間にも確かにフロンティアは存在するが、歴史的アフガニスタンに関してこの点に焦点をあてた研究は未だほとんどなく、本研究計画立案時、申請者はこれが新しい研究の方向性となりうると確信した。

2. 研究の目的

本研究は、従前に申請者が行ってきたアフガニスタンを中心とする地域の前近代史に関わる

実証研究をもとに、中央アジア、西アジア、南アジアが接触する境界領域/フロンティアとしての同地域の特性を考究することを目標とした。特に実体的フロンティアと理想的フロンティアの二つの側面に光をあて、アフガニスタンの諸都市がどのように漢籍、アラビア語史料、あるいはバクトリア語で記述されるようになっていくのかという点と、アフガニスタンおよびパキスタン北部における考古調査の成果と出土物（特に神像）との比較校合を通じて検討し、最終的にフロンティアとしての歴史的アフガニスタンとして総合的に考察することを目指した。

3. 研究の方法

主に二つの点にしばって、歴史的アフガニスタンのフロンティア性の解明を目指した。第一は、いわゆる行政地理の問題である。7世紀後半、中国の唐は西方の突厥勢力を滅ぼして旧西突厥領を支配下に再編し、ここに十六の都督府を定めた。そのための設計図とも言うべき都督府、州、縣、軍府のリストが正史や会要に載せられている。これらは人工的な行政区分であって、どれほど実際に機能したのかは怪しいが、これと例えばその数十年前に同じ地域を旅した玄奘の記録をくらべ、さらに二世紀ほど遅れて記述されるようになるアラビア語地理書に見えるアッバース朝の行政地理とを比較し、かつバクトリア語世俗文書に見える都市や町の成り立ち、および19世紀英露によるフィールドワークから知られる自然地理環境と照合することにより、アフガニスタン北部のような山岳地域の小規模王国が大帝国内に組み込まれていくプロセスを解明しようとした。

第二には初期イスラム時代のアラビア語、ペルシア語の驚異譚 (*ajā'ib*) や逸話集 (*hikāyat*) を博搜し、その中でいわゆる「偶像」がどのような地域と関連して登場するかを網羅的に調べること、初期のムスリム著述家の思い描いた理想的フロンティアの在処を探る。言うまでもなく「偶像」はムスリムにとって「異教」の象徴であり、それが観察される場所は、イスラム世界の外側か、あるいは境界線上であると見て良い。そこから「偶像」の「地理的な分布」が多少なりとも明らかになるようであれば、それと、世界各地の博物館等に所蔵される歴史的アフガニスタン由来の出土神像とを照合し、現実と理念のフロンティアがどのように関連し、どのように独立して存在し得たのかを考ようとした。

4. 研究成果

研究成果としては、論文や学会発表、招待講演などの形で発表された研究と、研究体制や組織作り、国際研究集会組織など、枠組み作りに関わる部分とに分けて述べる事が出来る。

(1) 個別研究

文献資料に基づく行政地理研究

前者については、アラビア語、ペルシア語、漢文などの文献資料、貨幣、遺跡分布などの考古関連資料などを博搜し、組み合わせて、歴史的アフガニスタンのフロンティア性を多角的に論じる研究を行った。研究目標に即して言えば、第一に7世紀の漢籍資料に見える中央アジア西部の行政地理情報が、唐の勢力の縮小とイスラム世界の拡大という傾向の中で、漢文、アラビア語それぞれの文献中にどのように記載され、それは両世界の行政地理に関わる文化のどの側面を反映しているのかという点を論じた論考(下記雑誌論文)、フロンティアとしての歴史的アフガニスタンの性格規定におそらくは大きな役割を果たした、ヒンドークシュ山脈がどのような場として機能し、新たなフロンティアの政治軍事勢力を生み出したのかを解明した論文(図書 所収)、考古学的調査、貨幣研究と文献資料を融合させ、ほとんど知られることの無かった前イスラム期～初期イスラム時代のアフガニスタン東部の歴史の一端を明らかにした論文(雑誌論文)、初期イスラム時代に具体的にどのようにしてヒンドークシュ山脈を越えた

のかという点を詳細に論じた論文（学会発表/学術講演、；図書 所収）などを発表した。これらは主に歴史地理、考古・貨幣資料と文献資料の融合という観点からの研究である。

「偶像」研究

一方いわゆる「偶像」を扱ったものとしては、2001年に爆破されてしまったパーミヤーン仏教遺跡、特にその二体の大仏がイスラム時代の文献資料（地理書、驚異譚文学）や19世紀ヨーロッパ人旅行者の記録にどのように登場し、それぞれの時代における描写はいかなる特徴を反映したものであったか、特にイスラムにとって否定すべき対象である筈の仏像がどのようにその認識を変容させつつ2001年まで存続してきたのかを考察した報告（学会発表/学術講演、、）がある（今年中に論文が刊行される予定）。

(2) 国際シンポジウム、研究集会組織

次いで研究体制、枠組み作りに関わる部分では、2017年6月ノートルダム大学（アメリカ）中世研究所と共催で、国際シンポジウム The History and Culture of Iran and Central Asia in the First Millennium CE: From the Pre-Islamic to the Islamic Era（2017/6/25～6/27）を、ノートルダム大学 London Global Gateway（Suffolk Street, London）にて開催した。同シンポジウムには23名（日3名、英6名、米5名、仏2名、中1名、澳2名、露1名、蘭1名、イスラエル1名、ウズベキスタン1名）の世界を代表する研究者が集まり、バクトリア語文書の研究、中央アジア西部における考古学調査の進展、既存文献資料に関する新たな観点からの研究など、2000年代後半～2010年代前半における当該地域/時代にかかわる新たな研究成果、研究動向について報告・議論が行われた。シンポジウムの成果は、論文集としてノートルダム大学出版局から出版すべく現在編集作業中であるが、すでにその内容は今後十年間の当該分野の研究の方向性を指し示すものとして関係者から高い評価を受けている。さらに2019年3月1日～3月2日には、ウィーン大学 から Deborah Klimburg-Salter 名誉教授、Verena Widorn 研究員、Jürgen Schörflinger 研究員、UNESCO から長岡正哲氏ら 専家を招き、国際ワークショップ Towards the Comprehensive Image Database on Bamiyan Buddhist Site を開催した。同ワークショップは、1960年代以降、京都大学海外学術調査隊によって撮影、蒐集された様々なデータを整理し、一般にも利用しうる形で公開しようとする研究計画の一部であるが、特にすでに同系統のデータベースを作成し始めているウィーン大学（ヒマラヤ西部からアフガニスタンにかけての画像資料データベースの作成）および UNESCO（アフガニスタンのメス・アイナク遺跡の3次元画像データベースの作成と整備）との共同のもと、将来的に統合しうるような複数データベースを複数拠点において構築しようとする点に特徴がある。いずれにせよ、当該計画は、本研究計画において考究している「偶像」の問題と密接に関わる極めて貴重な資料であり、今後の作業の筋道を形成したという点で、当該地域の歴史、考古、美術にとって極めて価値の高い催しであった。さらにこれらの枠組みを通じて研究者間、研究組織間の新たなネットワークを形成し、より広範な研究活動の土台を築くことが出来たという点でも重要な成果であると考えられる。

以上のような個別研究と、枠組み作りの作業の成果に立脚し、当初の予定通り2019年度からは本研究を発展させた科学研究費補助金基盤 B「前近代ユーラシアにおける山岳フロンティアの歴史的研究」プロジェクトをスタートさせた。同研究プロジェクトにおいては、カラコルム、ヒンドークシュ、パミール、コペトダウ、アルプス、コーカサスといったユーラシア大陸を東西方向に伸びる大山脈群（アルプス・ヒマラヤ造山帯の東半）における考古遺跡分布、山

岳社会形成史の研究とともに、それら山岳地帯のフィールドワークを積極的に遂行し、研究を深化させるべく計画を練っている。本研究計画において完遂することが出来なかった目的（ロシア側資料の精査や偶像分布地図の作成など）については、引き続き基盤Bのプロジェクトの中に組み込み考究を進める予定である。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

Minoru Inaba, From Caojuzha to Ghazna/Ghaznin: Early Medieval Chinese and Muslim Description of Eastern Afghanistan, *Journal of Asian History*, 査読有, 49, 2015, 97-117.

Minoru Inaba, Between Zabulistan and Guzgan: A Study of the Early Islamic History of Afghanistan, *Journal of Inner Asian Art and Archaeology*, 査読有, 7, 2017, 209-225.

〔学会発表/学術講演〕(計8件)

Minoru Inaba, On the Muslim Descriptions of Bamiyan Colossi, at the conference “Buddhist and Muslim Encounters in Premodern South Asia,” Department of South Asian Language and Civilizations, University of Lausanne, 2015/10/13

Minoru Inaba, Central Asia in the mid-8th century: Wukong’s Itinerary towards India, at the workshop “Moving Borders: Current Research on Afghanistan between Inner and South Asia,” Austrian Academy of Sciences, 2016/1/26

Minoru Inaba, The Islamic History of Bamiyan Buddha, 復旦大学映日講座, 2016/11/28

Minoru Inaba, The Islam and Bamiyan Buddha, at Princeton University Department of Near Eastern Studies Seminar, 2017/11/6

Minoru Inaba, The Muslim Narratives on the Bamiyan Buddhist Remains, at Drexel University Department of Art History Special Lecture, 2018/2/15

Minoru Inaba, The Travels of Chinese Buddhist Monks and the Medieval History of Central Asia, at University of Notre Dame Medieval Institute Special Lecture, 2018/3/8

Minoru Inaba, Did Hindukush Really Kill Indians?– Geography and Historical Routes across Afghanistan, at Harvard University Inner Asian and Altaic Study Lecture, 2018/4/18

Minoru Inaba, Buddhist Monuments to the West of Bamiyan, at University of Delaware Asian Study Program Special Lecture, 2018/4/25

〔図書〕(計4件)

井谷鋼造・稲葉穰(訳) 岩波書店、統治の書、2015、398

A. C. S. Peacock, D. G. Tor, M. Inaba 他, I. B. Tauris, *Medieval Central Asia and the Persianate World*, 2015, 240

D. G. Tor, M. Inaba 他, E. J. Brill, *The ‘Abbasid and Carolingian Empires: Comparative Studies in Civilizational Formation*, 2017, 231

小松久男、荒川正晴、岡洋樹、稲葉穰他、山川出版社、中央ユーラシア史研究入門、2018、413.

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。